

高木軍医総監の診察風景

綿谷 雪編「幕末明治実歴譚」の中に、高木兼寛が講師・桃川如燕を診察する興味深い場面があるので、それを多少変更してここに紹介する。

七、八年前（明治24、5年頃一筆者）、軍医総監の高木先生のところに人の集まりがありまして、そのとき如燕に講談をやれということになりました。人の集まりますまで、先生が自分の居間へ如燕を呼んで、茶などを喫ませまして、

先生「如燕、どうも、いつも達者でよいな」

如燕「有難う存じます。おかげをもちまして、私は菓を一服飲んだことがございませぬ。少し気が閉じますと、熱爛にして二、三本も引っかけますと、それでもう快気いたします。それだけが如燕の得でございます」

先生「それは何よりだ。ただども、あまり年をとってから酒をたくさん飲んじゃあいかぬ。それに貴公は、だいふ婦人が好きだそうだな」

如燕「ヤ、どうも、これは御前のお言葉とも存じませぬ。好きと申すでもございませぬが、しかし一夜でも一人では寝にくうございます」

先生「それがどうも困るテ、ドレ身体を診てやるうか」

如燕「それはどうも有り難う存じます。御前のお手を頂戴いたしますれば、如燕もこの上なく有難いことに存じます。どうかよろしく御診察を願います」

と、それから高木先生こまやかに診察して下さいまして、

先生「如燕、貴様は珍しい身体だ。まず千人と言いたいところだが、万

人にもない良い身体だ」

如燕「ハハア、左様でございますか」

先生「胃もよし、肺も十分なり、殊に腸などは申し分ない。脳もよし、これといって憂うところがない」

如燕「死にませぬかな」

先生「冗談いっちゃいかぬ。死なぬことはない。迎えが来れば死ぬ」

如燕「左様でございますか」

先生「しかし病のために苦しむようなことはない。まず体格は申し分ない。どうも貴様は音声も出るわけだ。実に膜の備えなどは至極揃っている」

如燕「ハハア、どうも有り難う存じます。わずらいませぬか」

先生「わずらわぬ、病に倒れるようなことはない。半年寝ているの、一年わずらうのということはないから、心配いたすな」

如燕「イエ、どうも、大医が左様仰って下さったので、如燕はすこし生き延びましたような心持ちがいたします」

先生「然し、念のために言うて置くが、油断をしてはいかぬ。貴公の身体は壮健に相違ないが、けれども鉄のようなものだ」

如燕「とはまた、どういうわけでございますか」

先生「鉄はたいそう丈夫なようだが、脆いからぼきりと折れる憂いがある。如燕の身体もその通りで、大そう壮健のようだが、その代わりぼきり折れるようなことがあるから、気をつけねばいかぬテ」

と言うと、自体胆の小さい人でございますから、

如燕「へエ、折れますかな」

先生「今ではないが…」

如燕「今折れたら大変でございます…いつごろ折れましょう」

先生「それはどうも、わしにもわからぬ。まず暴飲暴食をつつしんで、運動は十分しているだろうけれども、好きな酒だと申して一日に

二升も三升も飲むようなことがあるとよくない。それがために病を惹き起こして、おのれの寿をおのれで詰めるようなことになる。マアママわしの診察では、いよいよというときに脳溢血か何かでぼっくり逝くだろう」

これを聞いて、如燕もだいぶ酒をつつしんだようですが、それにしましても、大家の申されたことは間違いないもので、如燕はまるで床について人事を弁じないというのはようよう一日半ばかりで、まことにどうも眠るがごとく、鉄の折れるがごとく往生を遂げました（明治31年一筆者）。あのくらの名医になりますと、その先のことがわかるものと見えます。